Peace Wave
沖縄の心を具体的な行動に
Transforming Okinawa's Heart into Action

Okinawa Peace Assistance Center

特定非営利活動法人
沖縄平和協力センター(OPAC)
沖縄県那覇市久茂地3-15-9アルテビル那覇
TEL(098)866-4635/FAX(098)862-0579
www.namcle.com/opac

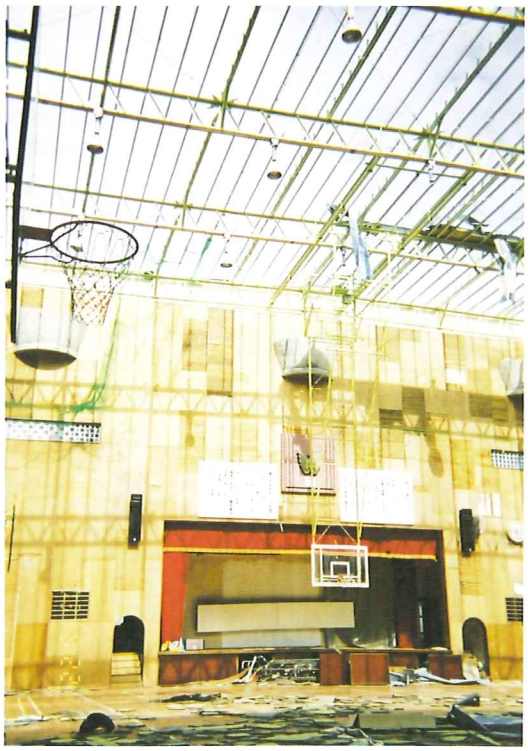
2003.Nov.1 No.2

OPACのロゴマーク
沖縄を飛び出し世界の現場で活躍することをイメージしました

宮古島　台風被災・復旧状況現地レポート

宮古島を襲った台風14号は、最大瞬間風速74.1メートルを記録し、死者1名、負傷者96名、約2万世帯が停電(全世帯の89%)、1,300軒以上の電話が不通になるという(9月12日の時点で)、1968年9月の第3宮古島台風以来の被害をもたらした。台風14号によって甚大な被害を受けた宮古島を訪問し、被災地の状況や復旧作業を視察した。

沖縄電力は最大時で450名～500名態勢で、NTTは最大時470名と車輛287台を使用して復旧作業にあたった。NTTの作業員は、2割強が沖縄本島から、約7割が他県からの応援でしめられた。復旧作業は夜を徹して進められ、台風通過からおよそ10日で電気は復旧した。電気の復旧が最も遅れた城辺町では、役場内に仮設洗濯場が設けられ停電により自宅の洗濯機が使えない住民が利用していた。



屋根が完全に吹き飛ばされた城辺中学校体育館

復旧に向けた初動体制

10日	沖縄県庁災害警戒宮古地方本部設置
11日	沖縄電力、NTTはそれぞれ災害対策本部を設置
12日AM7:30	沖縄県知事が自衛隊に災害派遣を要請
12日AM8:30	陸上自衛隊第1混成団第101飛行隊の偵察機1機が天候偵察
12日AM9:53	同第101飛行隊の輸送ヘリ2機、多目的ヘリ1機が宮古島に向けて離陸(自衛官8名、沖縄電力職員62名、NTT職員18名、県警機動隊13名、オートバイ2輌を輸送) 宮古島に着陸後、輸送ヘリ1機は沖縄電力職員16名を石垣島へ輸送
14日	輸送ヘリ2機で修理部品など約5トンを宮古島に空輸

物資の備蓄

コンビニの普及に伴い、以前は必需品とされた単1電池、ろうそく、非常食を常備している家庭は少なくなった。地震とは異なり、台風の進路は予測可能なため、直前の買出しで対応した家庭も多かった。また自家発電を備えるコンビニが増え、台風直撃の翌日には営業を再開したため、住民の間で混乱は生じなかった。

輸送・通信手段

復旧物資や要員の輸送は、初動期には自衛隊の協力を仰いだが、その後は沖縄電力やNTTが独自に実施した。電話が不通になったが、携帯電話の普及によって、緊急連絡用の無線を使うことなく対応が可能であった。

ボランティア・コーディネート

今回の復旧作業の主役は沖縄電力とNTTであった。赤十字による見舞い品の配布はあったが、NGOによる積極的な支援は見受けられなかった。現在、沖縄県下では他府県にあるような災害ボランティアが組織化されておらず、これは県内NGOの今後の課題といえる。

Security Review

沖縄から見た日米安保と東アジアの安全保障

OPACは9月19日に、財団法人平和・安全保障研究所（以下、RIPS）と意見交換会を開催した。RIPSからは、安全保障研究奨学プログラムの奨学生5氏と、山本吉宣氏（東京大学教授）、村井友秀氏（防衛大学校教授）が出席。一般の参加者をまじえて標記のテーマを中心に広範な意見が交換された。紙面の都合上、沖縄の今日を考えるうえで重要と思われる議論を特別に編集してご紹介する。

まずは仲村京子（OPAC研究員）が、議論のたたき台を提示。「沖縄の視点から見た日米安全保障は国家間の安全保障という枠組みではとらえきれない。在沖米軍基地は、沖縄の経済、社会、環境、教育などと密接な関わりを持っており、生活の中の日米安保というミクロ的な視点なくしては、沖縄から見た日米安保を理解することは不可能だ」と説明。「メディアの影響で沖縄の人はおしなべて、反基地というイメージが強いが、実際は沖縄内部でも世代や職業により意見の相違があり、一枚岩ではない」と結んだ。

RIPS：「沖縄にいろいろな意見があるとは、よく聞くはなしだ。しかし、その多様な意見を知ろうにも、論調の似た反基地の琉球新報と沖縄タイムスを読むしか手段がない。それ以外の意見を知ることが、本土の人にはできない」

RIPS：「基地を撤去するという。沖縄はその方が安全だというが、それでこの地域が安定するかという議論がない。沖縄の人は、基地を撤去することが最終目的。基地がなくなれば米兵による暴行事件など、米兵問題はなくなるだろう。しかし、そのあとで日本はどうやって国を守っていくのかという『その後』の議論がみえてこない。だから、安全保障の専門家に対する説得力はなく、いつも両者の主張が平行線をたどったまま終わってしまう」

OPAC：「日本の安全にとって在沖米軍基地がそれほど重要だというなら、沖縄の基地問題は沖縄だけの問題ではなく、日本全体の問題に他ならない。だからこそ、本土の人たちも、沖縄の問題は他人事ではなく自分の問題という認識を持ち、沖縄の問題、ひいては日本の安全保障の問題をもっと真剣に考えてほしい」

参加者：「沖縄から意見を発信しても、なかなか本土で受けとめられていないのが現状。今後、沖縄からより効果的な発信をしていくために、どのような戦略が必要か」

RIPS：「1995年の少女暴行事件で、一気に注目の高まった沖縄基地問題であるが、その時とった方法を研究し、今後に生かしていくべきではないだろうか」

RIPS：「沖縄の視点と本土の視点はよく言われるが、もうひとつの独立した重要なアクターである『ワシントンの視点』が欠けている。議論の中に『ワシントンから見た日米安保』をとりいれる必要がある。ワシントンの論理と視点を理解したうえで交渉して説得し、ワシントンをイエスといわせねばならない。何かトラブルがあってから受動的、消極的に基地問題について意見をいうのでなく、主体的、積極的、戦略的に理論武装をして発言することが求められている」

RIPS：「沖縄と韓国はゼロ・サムだ。韓国の反基地運動と仲がいいのは、米兵や基地による被害がひどいといった共感からだろう。それでは力を持たない。だいたい、韓国の米軍が撤退すれば、それがそっくり日本に来る可能性が大きい。相反する利害を持っているにもかかわらず、この部分に関する議論がないために、問題の本質がよく分かっていないのでは、という印象を外部に与えてしまう」

【RIPS】従来、安全保障について、自衛隊と日米安全保障体制に任せて日本国民が自ら責任を問うことが少なく、民間の研究機関が外国のように積極的に政府に対して政策を提案することもなかった。そのような現状を改善するため1978年の設立以来、独立した立場から平和と安全保障に関する調査研究を行い、世論の啓発に努めている。

Book Review

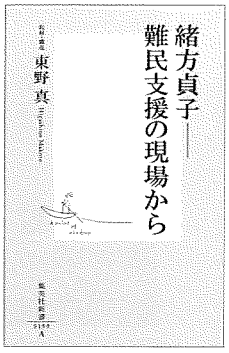
山田満『「平和構築」とは何か—紛争地域の再生のために』平凡社新書、2003年

「紛争地域で私たちは何ができるのか」という問いを、紛争の現場に自ら赴き、平和構築の実践に身を投じて真剣に追求した結果、本書が生まれた。平和ボケした傍観者的で評論調の平和学を脱し、当事者として自覚を持った新しい平和学を構築したい。そんな著者の意気込みが本書からは伝わってくる。「祈る平和」から「創り上げる平和」へ、平和構築に具体的につながる方法を考える起点・入門編として本書は位置づけられている。本書では、平和構築といった広範囲にわたる活動について、実例を挙げながら実際の取り組みを紹介することに主眼が置かれているが、その背後にある現代紛争や紛争社会の特徴、あるいは平和構築の理論的な枠組みについてもちらさず触れている。本書では、市民参加型の平和構築を考えるために、実践レベルと理論的なレベルの間を何度となく往復し、国際機関からNGOの活動まで横断的に考察している。平和構築の観点から人間の安全保障や国際協力を考えるOPACとしても大変参考になる一冊だ。〔上杉勇司・OPAC主任研究員〕

●著者から一言

OPACは東ティモールで平和構築プロジェクトの実施を計画しているそうですが、日本の平和構築への取り組みとしては、東ティモールは試金石。アジアの紛争地域における日本の責任を考え、日本のスタンスを明らかにする機会でもあります。私たち市民サイドからも東ティモールに平和な社会をつくるお手伝いをしていきましょう。

東野真『緒方貞子—難民支援の現場から』集英社新書、2003年



「私の仕事で、常に何がいちばん頭にあったか、あるいはあり続けたかというと、どうやって問題を解決するかということです。」

10年間にわたり、国連難民高等弁務官として、難民支援の現場に立って現実の問題に対処してきた緒方貞子氏の言動が、本書の至る所に盛り込まれている。決して抽象論や原則論に立つのではなく、「人の命を救うこと」を判断基準に困難な決断をくだしていった緒方氏の揺らぎのない考え方が伝わってきた。「現場へ行かないで抽象的に考えたものは、本当には効果がない」とまで言い切る緒方氏のコメントは、現実の状況と生身の人間に対応してきた者だけが持ち得る自信に満ちている。現場を知り、現場感といったものの中で具体的に判断することの大切さを本書は示唆している。

抽象的で神学論的な議論に我々の思考を制限されることなく、現場主義、問題解決型思考、自由な発想に根ざした議論を展開することの大切さを、本書を読んで改めて認識した。〔上杉勇司・OPAC主任研究員〕

NGO この人に聞きたい

第1回 熊岡路矢さん

シリーズ第1回は、日本にある『国際協力NGOの老舗』、日本国際ボランティアセンター(JVC)の代表理事の熊岡さんにお話しをうかがいました。「沖縄には思い入れを持っています」と熊岡さん。JVCの初期のメンバーにも沖縄出身の人がいたといって、『NGOの挑戦 下』(めこん)の巻末のスタッフ・リストを開き、玉那覇陽子さんと仲田奈々子さんの2人が関わっていたと教えてくれました(どちらかご存知の方はOPACまで一報してください)。

くまおか・みちや/1947年東京生まれ。1970年に東京外語大学中国科中退後、自動車修理工などを経て、1980年にタイでJVCの活動に参加。

――設立当初のことを聞かせてください。

組織があってスタートしたのではなく、最初は活動をしたい人たちが集まった運動体でした。カンボジア難民救援のため'80年2月27日にJVCの設立総会が開かれた場所はタイのバンコクでした。もうその日には、タイ・カンボジア国境の難民キャンプで救援活動をしている人たちもいました。バンコクにいる日本人の主婦のボランティアが30〜40人、日本から行った平均年齢22、3歳の若者が100人くらい集まっていました。後者は、ルックス的に「バックパッカー」とか「ヒッピー」といわれていました。

――組織らしくなったのはいつ頃ですか。

'83、4年になって、組織として続けなきゃいけないと思いました。それまでは毎年がんばって12月の終わりまで活動して解散かというように考えていました。'85、6年になるともはやこれが職業だという意識ができてきた。'90年前後にはリクルートスーツを着た大学4年生が「御社は…」などといって就職の面接に来るのを見て、NGOが就職の対象になるのだと知りびっくりしました。

――運動のうねりというか、波があったのではと思いますが。

'79、80年のカンボジア難民流出があり、'84、5年のアフリカの飢餓、'91年10月パリ合意から始まるカンボジア和平、'92年リオデジャネイロの環境と開発会議、それに続く北京の女性会議。また、'95年阪神淡路の震災は、ボランティア元年だと位置づけています。

――ベトナム反戦運動の日本社会への影響をどう思いますか。

ベトナム反戦運動は、日本(人)がアジアと世界に目を見開くという意味で大きな影響を残したと思います。'75年にベトナム戦争が終わって表面的には見えなくなってしまったわけですが、今の社会にも底流として影響を残していると思います。

私のベトナム反戦運動の反省点として、ベトナム自体、そして人々をよく知らずに反戦運動をしていたことがあります。ベトナム民族主義や、反植民地主義への共感があって運動をしていました。'80年にタイ・カンボジア国境キャンプで救援活動を始めて、難民を通してですが、ベトナム・インドシナの人々や歴史の一端を具体的に理解できるようになりました。

――現在、数が増えた日本のNGOを見てどう思いますか。

確かに数は多くなりました。しかし、日本社会の総合力や経済力を考えると多いといえるでしょうか。'95、6年のJANIC調査で、日本の国際協力NGOのサポーターは合計約30万人ということだった。だから1億分の30万かというとそうではなく、1人で複数のNGOの会員になっていることも多いので、あくまでも延べ人数です。それから7、8年たった今も、人数は増えていないといいます。

でも、日本の人々が寄付していないかというと、そうではない。町内会の会費から日本赤十字社へ。学校のしくみを通じてユニセフ協会へ。その2つに集まった残りを50〜100くらいのNGOで分けあっている状態です。その中で、こどもの写真をだしての奨学金的な仕組みによく募金が集まる。地味な開発協力のNGOに十分集まっていかない。これは、まだわれわれNGOの信頼度が足りないからだもいえるのですが。

――欧米のNGOはどうですか。

たとえば、イギリス。人口は日本の半分ほどですが、御三家のオックスファム、クリスチャン・エイドとセイブ・ザ・チルドレンは、年間予算はおおむね100〜150億円位で、アメリカの中規模以上の大きさのNGOサイズです。それ以外に政策提言型を含め、たくさんのNGOが活躍している。日本の方が経済力は上ということになっているが、大きな違いだ。それは日本人のメンタリティーとか政府・官僚中心の体制(最近はかなり不信感をもたれているにしても)に原因があると思う。ガバメント(政府)を信じるのか、NGO・市民社会を信じるのか、というときに、まだまだ市民社会やその団体を信じるというほど信頼を勝ち得ていない。欧米の場合、端的に政府は信じないという人が多く、選べるのだったらNGOに寄付をいれますよ、という感覚が普通らしい。

たとえばドイツでは、交通違反をした時に警官が表を持っていて、罰金をこのNGOに入れますよという選択ができるようになっていると聞く。

それから、税金控除などのシステムの違い。NGO自体および、NGOに寄付した人への税金の控除のしくみが日本でも始まったが、その資格取得の規準が難しく、まだ一般的なものになっていないということがある。

しかし、思いおこせば、私たちが80年にNGO活動をはじめた時には「アウトサイダー」扱いだったものが、今は外務省と定期協議をおこなったり、まがりなりにも一般企業も含めたところからの支援が語られたり、大きな変化・進展があります。'89年以来ODAにNGO事業補助金や草の根無償の仕組みができるなどの変化もあります。

――長時間、ありがとうございました。

OPAC この一年

OPAC（ちなみにオーパックと読みます）がこの11月で誕生日を迎える。やっと１歳、この１年を上杉事務局長に振り返ってもらった。

――激務つづきで少しヤセたんじゃありませんか。

と、思うでしょ。実は、ウエスト4センチくらい肥りました。かりゆしウェア（沖縄をアピールする柄の県産アロハ）はチノパンのお腹の部分を隠せるので助かります。沖縄料理と泡盛が美味すぎるからです。

――昨年11月に発足する前は、設立準備室だったのですが、そもそも設立準備室はどのようにしてできたのですか。

おととしの11月、南西地域産業活性化センターの小会議室をゲリラ的に占拠したことが始まりで、昨年４月に設立準備室が正式にできたわけです。現在のオフィスは昨年11月に引っ越したものです。

――OPACは米軍ともアクセスがある変わったNGOでもあるわけですが。

はい、基地問題をめぐる当事者としての沖縄県民と米軍の橋渡しをうまくできればと思い、溝の両サイドへのアクセスを築きました。対立の溝を深めるのではなく、相互理解を促すためにマスコミと一緒に何かできないかと考えました。そこで、マスコミを含めた県内のさまざまな人たちに集まってもらい、安全保障問題や基地問題について意見交換をする場を設けました。

――JICAの事業も、受注しています。

沖縄で安全保障問題といえば、どうすれば米軍基地を整理縮小できるかというものです。ポジティブで胸を張れる国際協力をやりたいと、JICAに平和構築プロジェクトの企画書をもって訪問したことがはじまりでした。ちょうどその頃、JICAでも平和構築への感心が高まっていたようです。担当者がやる気満々で、たちまち意気投合。とんとん拍子で「JICA留学生セミナー『沖縄と平和構築』」が実施されました。以来、留学生セミナー2回、青年招へい1回のJICA事業を受託し、そのたびに及第点を取りました。いまは、本部からお話がくるようになり、来年2月はアフガニスタン青年を招へいします。

――OPACばかりでなく、日本のNGOにはインターンの存在が不可欠となっていますが。

数えてみると長期で11名、短期で4名のインターンに今まで来てもらいました。設立準備室の前身から2年間で15名ということになります。

――人に恵まれましたね。

人にも運にも恵まれました。いくつものイベントを通して人脈が広まった。同じような意識をもつ若い人が集まって発展してきた組織で、全体のカジとりは組織運営にたけた理事長がしてくれた。結果的に、出入りは激しいが、固定化せず柔軟に形をかえられる組織ができあがったと思います。

経理面でも専門家がいるため、JICAには「OPACの会計報告は東京の組織並みだ」といわれました。明朗会計のNPOなので事業に集中できます。

さあ、みんな２年目もがんばろう。

志麻子の初体験

インド、生を感じた旅

OPAC賛助会員
伊波志麻子

旅行中の日記を読み返した。「すべてはつながっている。」「牛顔の犬発見!」「体中の毒素が抜けた。毛穴全開!」「人間に会っている。」「自分が日本人であることがキツイ。」「恐るべし!インド!」と、感嘆詞だらけの興奮語録で、他人が読むと理解不能だろう。だが私にはその意味不明な表現から、風景や人や匂いが一瞬にして鮮明に蘇る。まさにこれがインドで、表現し難いことばかり。私達日本人にとっては想像を絶する国なのだ。インドを旅した人に、「インドってどんな国？」と聞くと、きっと大多数の人が、「うーん」と言葉に詰まって「とにかく行ってみて!」と答えるに違いない。口では言えない、行って見なければ分からない素晴らしい魅力がある。旅行後2年経った今でも濃いインドを消化できない私の胃をすっきりさせるため、旅した10ヶ国以上のうち、最も好きなインドへの思いを爆発させるため、精一杯インドを語ってみよう。

インドへの旅は2001年8月19日～28日までの10日間。荷物はリュック一つ。最初のインド体験はバンコクから乗り継いだ飛行機の中。乗客のほとんどがインド人なのだが、彼らは「同性愛者？」と誤解するほどに肩を組み、顔をものすごく近づけて喋る。自分の席から離れて通路で喋る。ビールを片手に通路を越えた席の友達を呼んでは喋る。離陸時のシートベルト着用のサインは無視し、やりたい放題で、とにかく落ち着かず動き回って喋る。タイ航空の客室乗務員も彼らのパワーに圧倒されていた。何をこんなに席を離れてまで喋ることがあるのだろう？機内みんな友達なの？初めて触れたインドに戸惑いながら、機内食のタンドリーチキンを食べ、これから飛び込む旅への心の準備をした。

カルカッタに降り立った私は両替所へ。ここでもインド人が後ろからも横からものぞく。プライバシーという言葉などきっと彼らには存在しない。日本人は特に狙われるからと気合いを入れた私は彼らを敵視してキッと強い目つきでにらんだが、みんなはニコニコ、楽しい旅をしてくれ、とでもいう笑顔。疑ってごめんね、と心の中で謝り空港から外へ出た私を待ち構えていたのは、タクシーのお誘い。乗るとも言ってないのに3、4人の運転手が近づいてきて勝手に私の鞄をトランクの中へ。乗ったら今度は葉書売り、花売り、窓ふきなどの物売りが窓から顔を入れて迫ってくる。「もうほっといて。」人の勢いと湿気と砂を含んだ暑さに既にぐったり。そのとき目の前をおんぼろバスが通った。窓枠はあってもガラスのないドアからも窓からも人が溢れ出そうなくらいぎゅうぎゅう詰めになっている。私は

仕事そっちのけでデジカメを覗き込むインド人従業員たち（写真手前が筆者）

一瞬でこれまでの状況が理解できた。彼らは常に人と密着、接触して生活しているのだ。飛行機で見た風景も両替所でのことも彼らには普通なのだと。そう考えるようになると、キスするくらい顔を近づけて喋ることも、断っても後をついてくる物売りも、デジカメで撮っていると、見せて、撮って、と言い寄る人々も気にならなくなった。逆に私も「あなたたちと同じくらいに積極的に接近戦でやりあえるわよ」ってな気分で思いっきりインド人と密着することに腹を決めた。そうして出会った多くのディープな人達。人間として人間を精一杯生きている人達。そんな素晴らしいインドの人達を紹介する。

レストランでビール（世界一のおいしいKalyani Beer）を飲んだ時に出会った店員は、「女の子がこんなにお酒を飲むなんて‥、何か悩みとか嫌なことがあったのなら話してくれ」と親身になって私のことを心配し、隣に座って息がかかるほどの距離で人生相談を始め出した。気付いたら私のお金でその人も楽しそうに飲んでいる。あらっ？

空港の手荷物検査所で私は箱に入った飴玉セットをもらった。すると検査所の係員は、ずっと私を見つめ、私が通りすぎると追って来た。そこで一言「それもらってもいい？」「どうぞ。」「わーい。」もらった飴玉を手に本当に素直な子供の笑顔で走って持ち場へ戻った20代後半〜30代前半の立派な社会人。

観光タクシーの運転手は、車中で私が少しでも寝ようものなら、「寝るな!楽しめ!」と怒り、「日本の歌を歌え!」と迫ってくる。「あなたがガイドでもあるのだから、観光案内して、インドの歌を歌うべきじゃないの?!」結局「上を向いて歩こう」「乾杯」「北の宿から」「いとしのエリー」「明日があるさ」「島唄」「渚のシンドバッド」など20曲近くを熱唱した私。

夜行列車で母の手作り弁当を食べていた21歳の革商人は、インドではどこにでも弁当を持っていくと言って、私にお袋の味を分けてくれた。「おいしい」と喜ぶ私に、あれもどうぞ、これもどうぞ、と手からそのまま口へ入れてくれた。

デリー駅で道を教えてくれたエリート風の7-3分けの学生は、「ここです」「僕についてきて」と片言の日本語で、私を観光局へ案内してくれた。でもなぜか、猛ダッシュ。駅の構内の人ごみを掻き分け階段を登り降り、ひたすらダッシュ。「ありがとう」と息をきらしながら言った私にウインクをして少年は来た道をゆっくりと戻って行った。

ガンジス川沿いで出会った花売り少女は、しつこく私の手足や洋服をひっぱって、必死で売ろうとまとわりついてきた。「またか。」インドでは子供を抱いた母親の物乞いや包帯を体中に巻いた老女の物乞いなど、施し目当ての人が大勢いる。最初は同情したが、段々と何の解決にもならないと思うようになって、施しは一切しないことにした。それで、まとわりついてきた貧しそうな少女に、私は非情なまでの無視を貫いた。買いたい物もしつこくされると嫌になるもので、負けてなるものかと強気で返してしまう癖が、インドで身についてしまっていた。5分間の攻防の末、その場を去る私に少女はとびっきりの笑顔で“Have a nice day”。これこそ真の人間の表情。はっとした。私は少女の中に何かとても尊いものを見た。富と貧困、強者と弱者、おごりと純粋さ、虚栄と素朴さ。世界が抱える多くの問題の縮図と解決法が見えた気がした。わずか20円の花束。買っておけばよかった‥‥。

ここまで書いて、活字では表現できないインドの人の空気や魅力の偉大さに改めて感動した。私の記憶に深く熱く激しくしっかりと貴重な１ページを刻んでくれたインドの人たちへ。感謝の気持ちを込めて「出会えて本当によかった。」

東ティモールに行ってきます。

OPAC
プロジェクトマネージャー
渡辺和雄

東ティモールは人口約100万人、面積は沖縄の6倍くらい。昨年5月に独立した21世紀最初の独立国です。社会不安の要因となっている失業中の元ゲリラ兵の社会復帰を促す支援事業をOPACは来年から展開します。具体的に何をすべきか、調査してきます。2ヶ月ほど沖縄を留守にしますが、東ティモールでがんばってきます。それでは、また。

『タジキスタンとカンボジアの内戦終結に果たした国際社会の役割』

OPAC事務局長・主任研究員　RIPS安全保障研究奨学生第11期生
上杉勇司　伊地哲朗

対内的な成熟と対外的な成熟

紛争解決の機運が高まるためには、内的要因と外的要因の2種類の諸条件がそろうことが必要である。内的要因とは紛争当事者が和平を望むことであり、「対内的な成熟」のこと。外的要因とは、紛争を取り巻く関係各国が和平に向けて協力することで、「対外的な成熟」と呼ばれる。

タジキスタンの和平プロセスを促した内的要因として、紛争当事者のラフモノフ政権とタジク反対派連合（UTO）双方が、内戦において自らが軍事的に勝利する確信を失い、政治的解決による戦争終結を模索していた点が挙げられる。

外的要因としては、特に1996年9月のタリバンによるカブール陥落後、紛争当事者を政治的、経済的、軍事的に支援してきた関係各国、中でもロシア、イラン、アフガニスタン（北部同盟のラバニ・マスード派）が積極的に和平を働きかけた点が考えられる。すなわちタジキスタン内戦の場合、対内的にも対外的にも紛争は成熟しており、解決に向けた機運が高まっていた。

ところが、カンボジアの和平プロセスの場合、対外的な成熟度に比べ対内的な成熟度は不十分であった。冷戦の終結でソ連からの援助が途絶えたベトナムは、カンボジア紛争からの撤退を画策し、他の関係各国（タイ、中国、ソ連、米国）も紛争の終結を望むようになった。関係各国からの援助のカットと圧力を受けた紛争各派は1991年10月にパリ和平協定に調印する。だが紛争各派のうち、強力な軍事力を持っていたポルポト派や、ベトナムからの支援を失ったものの依然として領土の大部分を支配下に置き、行政機関、軍隊、警察を掌握していたフンセン政権が、切実に和平を望んでいた訳ではなかった。そのため、和平協定後のプロセスは順風満帆とはいかなかった。

国連の役割

血戦を繰り返してきた紛争当事者が、和平交渉を進め、合意に達し、それを履行するためには、信頼できる中立的な仲介役や保証人が必要である。国連は、事務総長や平和維持活動（PKO）の派遣を通じて、このような局面で何度となく重要な役割を演じてきた。

タジキスタンでは、1997年6月の最終合意に至る和平交渉の過程で、歴代の事務総長特使・特別代表が、紛争当事者間の連絡役・パイプ役を務め、調停者として主導的な役割を果たした。また国連は、1994年9月のテヘラン停戦合意を受けて、国連タジキスタン監視団（UNMOT）を派遣した。ただし、治安維持で実質的な役割を果たしたのは、ロシア軍を中心とした独立国家共同体（CIS）のPKOであった。これは国連PKOと地域的機構のPKOとの協力のあり方として興味深い事例である。

カンボジア和平で国連が果たした役割は大きかった。国連は、内戦が戦闘状態から紛争処理へと至る移行プロセス全般を監督した。パリ和平協定が締結される過程では、安保理常任理事国が中心的な役割を演じ、和平合意の履行の段階では、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）がその重責を負った。特に注目に値することは、移行支援に関するさまざまな活動がUNTACの任務の中に組み込まれた点である。UNMOTの場合とは異なり、UNTACの場合は、平和維持から平和構築を含む包括的な役割を一手に引き受けていた。

多種多様な仲介者と仲介者間の連携・調整

和平プロセスには多様な第三者が介入する。中立的な仲介者もいれば、紛争の悪化を招く偏った介入もある。国連による介入があれば、非政府組織（NGO）が重要な役割を演じる場合もある。

タジキスタン和平プロセスには、ロシア、イランなどの関係各国、国連やOSCE、ダートマス会議の非公式対話グループなど多様な仲介者が関与した。それらの仲介者間の政策調整や役割分担は比較的うまくいった。その結果、複数の和平努力は競合することなく実施され、国連主導の和平プロセスに一貫性が保たれ、最終的に和平合意につながった。

カンボジア和平の場合には、関係各国が集ったコア・グループが国連安保理を中心に形成され、国際レベルでの政策調整を行った。他方、現場では多くの活動がUNTAC傘下で実施され、UNTACが基軸となってUNHCRやUNDPなどの連携を促した。

和平プロセスを壊しかねない抵抗勢力の処遇

和平合意が結ばれ、それが履行されるためには、和平プロセスを壊しかねない抵抗勢力をいかに取り込んでいくかが鍵である。例えば、アンゴラのように和平合意後の選挙に負けた勢力が戦闘を再開して内戦に逆戻りした事例もあり、抵抗勢力の処遇次第では和平が頓挫する可能性がある。

ソ連時代にタジキスタンを支配していた北部のレニナバード勢力は、内戦の結果、南部のクロブ新興勢力に取って代わられ、和平交渉からも排除された。またレニナ

バード勢力と密接な関係にあるウズベキスタンは、内戦初期にはロシアと共に軍事介入しラフモノフ政権の樹立を支援するなど主導権を発揮したが、和平交渉の過程で次第に脇役へと追いやられ、タジキスタン和平のあり方に不満を隠さなかった。だが、レニナバード勢力は直接的な軍事的脅威とはならず、タジキスタン和平を危機に陥れることはなかった。

カンボジアの場合、ポルポト派の軍事力は看過できるのもではなく、和平交渉においても、その後の履行過程でも同派を和平の枠組みに留めようと国連は苦心した。結局ポルポト派は和平プロセスから離脱してしまうが、和平の流れを変えることはなく、自らが正当性を失って瓦解していく。タジキスタンとカンボジアでは、抵抗勢力が結果的には和平プロセスから排除されたが、それによって和平の流れが覆されることはなかった。

紛争処理か、それとも紛争解決か

タジキスタンでは、戦闘に関与した二大勢力の政府とUTOの間で政治的な合意が実現し、戦争は一応終わった（紛争処理の段階）。しかし、他の政治勢力（レニナバード勢力など）を事実上交渉から排除し、内戦の主要な原因であった地縁主義が未だはびこり、紛争の根本的要因が除去された（紛争が解決した）とは言い難い。

カンボジアの場合は、パリ和平協定の実現によって、全面的な内戦に終止符が打たれた。その後、紆余曲折はあったものの、カンボジアは単なる内戦の終結（紛争処理の段階）から、より平和な社会づくりを目指して着実に前進している。ポルポト派の崩壊に伴い、内戦再発の恐れは減ったが、依然として紛争の根本的な要因であった暴力的な権力闘争は残っている。

キーワード　安全保障講座

[大量破壊兵器]

Weapons of Mass Destruction

OPAC研究員
成瀬志津子

イラク戦争で一躍有名になった大量破壊兵器(WMD)とは、核兵器・生物兵器・化学兵器の総称である。広島・長崎では米軍のB29爆撃機が原爆を運んで投下したが、技術の進歩にともないミサイルの弾頭に搭載して攻撃するようになった。

大量破壊兵器を手にして以来の人類の歴史は、より強力な兵器の開発と、それらを規制・管理していく努力の繰り返しとも言える。核兵器の国際的な規制は、1968年に締結された核兵器不拡散条約（NPT）を基礎に発展し、生物・化学兵器の規制は、1925年のジュネーブ議定書にさかのぼる。その後、生物兵器禁止条約と化学兵器禁止条約がそれぞれ1975年と1997年に発効し、人類はこれらの分野の兵器全廃に向けたハードルをまたひとつ飛び越えた。

条約を署名・批准した締約国が条約を遵守しているかどうかを検証する機関として、NPTに関しては国際原子力機関(IAEA)が、化学兵器禁止条約には化学兵器禁止機関がある一方、生物兵器禁止条約は同様の検証機関・手段を欠いている。生物兵器に使う生物剤が容易に作れ、軍事・民生用の区別が困難で、最先端のバイオテクノロジー技術がからむため、査察を受け入れることへの企業や国家の反発も強いからだ。

大量破壊兵器がならず者国家やテロリストに渡らないように、各々の兵器分野で国際的輸出管理レジームも設立された。核兵器分野では原子力供給国グループ、生物・化学兵器分野ではオーストラリア・グループといった具合だが、これらの不拡散努力の有効性を高めるため、大量破壊兵器の攻撃手段を規制するミサイル技術管理レジームも1987年に創設された。大量破壊兵器の脅威に対する国際社会の終わりなき戦いは続いている。

OPAC スタッフ紹介

OPAC研究員
仲村京子さん

「沖縄から世界の平和と安全保障を考えたい！」それが2年前OPAC(設立準備室）に入ったきっかけだった。その前は、中・高校の英語教師→企業で秘書や英語翻訳者→英国大学院留学(安全保障修士号取得)という華麗(?!)なキャリアを持つ。

あぁ、この2年間。最初の1年は、OPACの設立準備についやした。次の1年は、事業の運営に明け暮れた。OPACはこれからが勝負。沖縄から世界を見つつ、世界平和への沖縄の貢献を考える。

今とりくんでいる研究は、沖縄の戦後復興に関するもの。米軍統治下での沖縄の復興事例を紛争直後の国の復興に役立てたい、それが主な動機。同時に、世界的にもユニークな沖縄の経験を沖縄の若者にも知ってもらいたいという思いもある。

必要以上に表には出ない。陰で支えるタイプ。聞き上手。何事にも慎重。派手さは好まない。ただ、かつてはヒップホップダンスに夢中、という意外な一面も。今でも時間があればクラブに通いたいという。5人姉妹のまんなかで、週末は6人いる甥と姪のベビーシッターもこなす。

今後は、Defence Study（軍事研究）に力を入れたい。理由は、平和を築くためには軍事を知る必要あり、とのこと。向上心はいつまでも絶えない。研究者としての最終目標は15年後。沖縄発の世界平和へ大きく貢献できる存在になっていたい。マイペースではあるが、今後の成長が楽しみな女性である。（編集部　渡辺和雄）

国際協力フェスティバル

OPAC 出展しました

OPACスタッフ
長嶺聖子

フェスティバルでは、普段NGOの活動と縁のないような方々に活動紹介をすることが多く、様々な声が返ってきた。中には意外な反応もあり、「アフガン＝危険地帯」と拒絶してしまう方や国際選挙監視員を必要とする途上国の現状を理解することに苦しむ方などがいた。いつもとは違う新鮮な視点に触れ、NGO活動がまだまだ市民とかけ離れた存在であることを感じた。

国際協力の世界を覗くため会場を訪れた人々は、パネルや研修生の歌や踊り、ゲームなどを通して海の向こうの国々に出会い、今度は自分が足を踏み入れたくなったかもしれない。OPACの活動を「知ってもらう」ことが今回の出展目的であり、来年はそこから一歩ふみ込みたい。出展するNGO側と市民側、互いにステップアップが必要だろう。ひとつの知識としての異文化理解から、行動する国際協力へと市民の関心が広がっていくには、まだ少し時間が必要だろう。しかし、県内における国際協力への理解と関心を実質的に高めることができてはじめて、今回のフェスティバルの成果がみえてくるのだと思う。

OPACの活動について説明する筆者（向かって左）

OPACの活動紹介ビデオを観る人たち

やんばるの森から

［オキナワキノボリトカゲ］
撮影：保坂直人

この島の生きものすべてが哲学者

平田大一 詩人

NGO掲示板

11月7日（金）18:30〜20:30
「沖縄の戦後復興からイラクの戦後復興を考える」仲村京子
アルテビル（久茂地小学校裏）２階会議室

11月30日（日）15:00開場
国際協力コンサート「ヘンデル『メサイア』」
場所：昭和女子大学人見記念講堂（東京）

12月6日（土）15:30開場
国際協力コンサート「バッハ『クリスマス・オラトリオ』」
場所：いずみホール（大阪）
問い合わせ：JVCコンサート事務局　Tel.03-3836-4108

来年2月7日（土）1泊2日
アフガニスタン青年招へいに際して
ホストファミリー募集（担当：OPAC成瀬 Tel.866-4635）

編集後記

Peace Wave第2号で3つの新企画を始めました。新コーナー『やんばるの森から』は、写真家の保坂直人さんと小浜島出身の南島詩人こと平田大一さん（詩と書）によるコラボレーションです。やんばるの森でであった静寂で平和な瞬間をどうぞ。この憩いの森で、ひとときばかり足を休め、肩の力を抜いて、平和の音に耳を澄ませてみましょう。

沖縄から発信する「平和の波」であるPeace Waveでは、分かち合い（W）、愛し合い（A）、ボランティア精神（V）、エコ・コンシャス（E）をモットーに、今後も次々と新企画を登場させて、NGOの会報の枠を超えた読み物にしていきます。

次号は第3号（12月）・4号（新年1月）合併号です。11月8日〜18日までOPACは東ティモールに調査団を派遣しますので、次号では、東ティモールの素顔を特集します。年明けにはお届けできるかと思います。

振込み先	銀行：琉球銀行 本店 口座番号：普通469250 口座名：沖縄平和協力センター　理事長 金城清